江戸時代の「人魚」像（2）

―― 博物学の舶来を中心として ――

九頭見　和　夫

I. はじめに

前稿においては，主に文学関係の文献を中心に江戸時代における「人魚」像の解明に取り組んできたが，解明に際し文学関係の文献に劣らず重要な役割をはたすと推測されるのが，オランダや中国から舶来した博物学関係の文献である。キリスト教禁止を名目に，三代将軍徳川家光は，いわゆる鎖国令（1635年の「日本人の海外渡航ならびに帰国の禁止」および1639年の「ポルトガル船来航の禁止」）を出し，日本人の海外渡航だけでなく，オランダと中国を除く外国人の渡来も禁止した。その結果わが国の外国，とりわけ西欧の学問の受容において，それまで大きな役割をはたしてきた南蛮系すなわちポルトガルやスペイン系の学問はキリスト教との深い関わりのゆえに急速に衰え，かわりに「紅毛」すなわちオランダ系の学問である蘭学が独占的な力を発揮することになるのである。

本論においては，前述の事実をふまえ，オランダより舶来したヨーン・ヨンストンの『動物図譜』(1660年) 及び中国より舶来した李時珍私撰の『本草綱目』(1596年)の両博物学書に注目し，両書が江戸時代における「人魚」像の形成においていかなる影響を及ぼしたか，江戸時代に刊行された博物学関係の文献を中心に検証する予定である。対象となる文献は，野呂元丈の『阿蘭陀禽獣虫魚図和解』(1741年)，貝原益軒の『大和本草』(1709年)，寺島良安の『和漢三才図会』(1712年)，新井白石の『外国之事調書』，後藤梨春の『紅毛談』(1765年)，大槻玄澤の『六物新誌』(1786年)，小野蘭山の『本草綱目啓蒙』(1803年)，司馬江漢の『西洋画談』(1799年) 等である。

II. 鎖国と博物学の舶来

1. ヨンストンの『動物図譜』

徳川幕府による鎖国令実施以後海外文化輸入の唯一の門戸となった長崎を経てわが国に舶来した最初の西欧の博物学書は，1633年以降毎年恒例となったオランダ人の江戸参府に際しオランダ甲比丹（商館長）より幕府に献上されたドドネウス Rembertus Dodonaeus（1517年-1585年）の『草木誌』Crvydt-Boeck（1618年と1644年刊行のオランダ語版）とヨンストン John Jonston (1603年-1676年）の『動物図譜』(1660年刊行のオランダ語版)[1] である。前者はオランダ商館長ワーヘナル Zacharias Wagenaer により1659（万治2）年3月に，後者はオランダ商館長インダイク Hendrik Indijk により出版後わずか3年の1663（寛文3）年に4代将軍徳川家綱に献上されたが，「人魚」像との関係で特に注目したいのは後者である。

ポーランドに生まれ，その後オランダのライデン大学医学教授の地位を得たヨンストンは，15篇以上の著書を残したが，その一つオランダ語版『動物図譜』(Naeukeurige Beschryving van de Natuur der Viervoetige Dieren, Vissen en Bloedloozse Water-Dieren, Vogelen, Krankel-Dieren, Slangen en Dranken）は，第一部「四足動物自然誌」，第二部「魚類と無血水棲動物自然誌」，第三部「鳥類自然誌」，第四部「有節動物，蛇類，龍類自然誌」の4部から構成され，全ページ数は800ページを超え，252枚の挿図はすべて1ページ大の銅版の図版からなる豪華本である。なお「人魚」は，第二部第四本「異国の魚類」の第三章「変形した魚も含めた数種の魚類」の中に，「ゴ

アの魚」等とともに分類されている。[2)]

ヨンストンは，人魚を「人間の形をしたアントロポモルプス Anthropomorphus，別名レモラント Remorant」と命名し，ドイツのイエズス会士キルケルス Kircherus の博物学書を参考に「アントロポモルプス」（人魚）を紹介する。

> この魚は，数年前東インド洋上のフィサイサ諸島近辺にあるピクテン諸島と呼ばれているイスパニア人の領土で捕まえられた。それは，ほぼ人間の形をした魚である。その魚を彼らはそれ故「ペッヒ・ムーヘル」，すなわち婦魚と呼ぶ。そして住民からは「デュイオン」と名付けられている。

この「人間の形をした魚」と呼ばれたアントロポモルプスの具体的な容姿についてヨンストンは以下のように記している。

> その魚は，丸い頭を持ち，首がなく身体にぴったりくっついている。耳たぶは，小さな耳とも呼ばれるが，軟骨からできていて，肉でおおわれている。そしてその内部は，激しく水を放水できるように形づくられ，人間の耳と同じ形をしている。目は，魚の働きではなく，人間と同じ働きをしていることがわかる。鼻は，二つの頬の間をのびてはいない。歯は，魚の場合のように，のこぎり状ではなく，丸みをおび完全に白い。胸は白い皮膚でおおわれ，男性の身体の場合よりもいくぶん広く突き出ている。しかし既婚の女性におけるように，垂れ下がらずに，まだ乙女におけるように張っていて，白いお乳である。腕は長くなく，泳ぐのに便利なように幅が広い。しかし肘がなく，手がなく，指関節もない。[3)]

さらにこのアントロポモルプスの医学的な効能についてもヨンストンは記している。

> この魚の骨は，血を止めるために，血をかためるために大変力がある。（この魚の骨によって）ちょうど動脈がしまったように，流れている血の勢いがやわらげられることを人々は知った。

博物学書という本の性格にもよるのか，ヨンストンの伝える人魚（アントロポモルプス）の容姿は，手の指がないなど若干の相違は認められるものの，ほぼ現実の人間の女性に近く，井原西鶴等江戸時代の文学者が描く人魚像に見られるようなロマンチックな印象とはほど遠く，極めてリアルに描写されている。特に注目したいのは，人魚の骨が止血の効能を有することであるが，既に紹介した井原西鶴等江戸時代の文学作品に登場する人魚においては人魚のこのような効能については全く言及されていないのである。

ところでこのヨンストンの『動物図譜』は，オランダ商館長から徳川家綱に献上された1663年当時オランダ語を多少とも理解できる者が長崎滞在の和蘭通詞（通訳官兼商務官）のみで徳川幕府内にはほぼ皆無であったこともあり，長い間幕府の文庫に納められることになる。この『動物図譜』に光をあてたのは，薬用など実利目的ではあったが，西洋の知識を積極的に輸入しようとした八代将軍徳川吉宗で，1717（享保2）年のことである。吉宗から青木昆陽とともに『動物図譜』の解読を命じられた幕府の医官野呂元丈（1693年-1761年）は，参府したオランダ人商官長との質疑等を手がかりに，1741年『阿蘭陀禽獣虫魚図和解』を完成する。しかし本書は，医官として『動物図譜』の有用さを認めることが出来なかった野呂元丈が，ヨンストンの『動物図譜』からわずか81種の動物名を取り上げ簡単な解説を試みたにすぎないものである。例えば「人魚」。

> 人魚　アントラホウモルスステタル　羅語[4)]

ヨンストンの『動物図譜』に記載された「人魚」が詳細に紹介されるのは，本書が幕府に献上されてから120年以上経過した大槻玄澤の『六物新誌』（1786年）によってであるが，『六物新誌』については後に触れる。

2.　貝原益軒の『大和本草』

18世紀以降，特に八代将軍徳川吉宗の誕生以降，実利的な薬用研究を目的とした本草学が幕府，諸藩で盛んになったが，その端緒となったと思われるのは，林信勝が1607（慶長12）年長崎で入手

した李時珍私撰の『本草綱目』（1596年）52巻である。日本のみならず欧米にも大きな影響を与えた本書は，全体が16部から構成され，部はさらに60類に細分されていて，全部で1,903種の薬物を収載している。例えば「人魚」は，イルカやオオサンショウウオなどとともに「鱗部」の「無鱗魚」類（28種）の中に分類されている。[5]

『本草綱目』の影響が指摘される本草学書としては小野蘭山の『本草綱目啓蒙』（1803年）など少なくないが，「人魚」との関係で最初に取り上げたいのは，貝原益軒（1630年-1714年）の『大和本草』（1709年）である。本書は，本編16巻，附録2巻，図譜3巻から構成され，全部で1,362種の動物・植物・鉱物が収載されている。「人魚」及び人魚に類する動物が記載されているのは，「巻之十三・魚」と「附録・巻之二」で，具体的な名称を記すと，「巻之十三・魚」では，「河魚三十九種の中に「鯞魚」と「鯢魚」が，「海魚八十三種」の中に「人魚」と「有足魚」が，また「附録・巻之二」では，「魚類」の中に「海女」と「海人」が収載されている。関係する部分を引用する。

巻之十三・魚之上（河魚）

鯞魚（にんぎょ）

名人魚，比類二種あり。江湖の中に生じ，形鮎（なまず）の如く，腹下につばざさの如くにして足に似たるものあり。是鯞魚なり。人魚とも云。其声如小児。又一種鯢魚あり。下に記す。右本草綱目の説なり。又海中に人魚あり。海魚の類に記す。[6]

鯢魚（さんせううお）

渓澗の中に生ず。四足あり。水中のみにあらず。陸地にてよく歩動く。形も声も鯞魚と同。但能上樹。山椒樹皮を食ふ。国俗これを山椒魚と云。四足あり。大さ二三尺あり。又小なるは五六寸あり。其色こちに似たり。其性よく膈噎を治すと云。日本處々山中の谷川にあり。京都魚肆の小池にも時々生魚あり。小なるを生にて呑めば，膈噎を治す。[7]

魚之下（海魚）

人魚

本草綱目鯞魚集解。引徐紘稽神録云。謝仲玉者。見婦人出没水中。腰以下皆魚。乃人魚也。又徂異記云。査道奉使高麗。見海沙中一婦人肘後有紅髭。問之。曰。人魚也。鯞鯢も亦人魚と云。乃名同物異。日本紀二十二巻推古帝二十七年。摂津国有漁父。沈罟於掘江。有物入罟。其形如兒。非魚非人。不知所名。今案。比魚本邦に處々稀有之。亦人魚の類なるべし。[8]

有足魚

魚の名に非ず。海中に四足ある魚あり。其長数寸，又海中に，背に足ありて，好んで物にとり付魚あり。是亦長数寸。いずれも小魚なり。和名漢名未詳。亦弾塗にも前足二ありて，好んでをどる。むかでくじらに足あり。鯞魚二種皆脚あり。婦人に似たる人魚も亦有足。右にしるせり。[9]

附録巻之二・魚類

海女

海中にまれにあり。半身以上は女人にて，半身以下は魚身なり。其骨下血を止る妙薬なり。世に人魚と云者是歟。蛮語に，其名へいしむれると云。

海人

在海中。其形全く人なり。頭髪鬚眉悉く具れり。只手足の指水鳥の如く，相連つて水かきあり。不能言語。飲食を与れども不食。又一種遍身肉皮ありて腰間に下り，垂袴たるが如し。其餘は皆人也。陸地に上り，数日不死。[10]

貝原益軒は，「鯞魚」及び「人魚」の記述の中で李時珍私撰の『本草綱目』について言及しておりその影響は明白である。また益軒によれば，『日本紀』の第22巻に，推古天皇27年，摂津国の漁師が網をしかけたところ人間でも魚でもない「人魚」と推測される足のある魚が網にかかったことが記されているとのことである。このことは，藤沢衛彦作成の第三番目の人魚出現の記録[11]にも合致している。ところで『大和本草』の「人魚」の記述で特に注目したいのは，本書が薬用に関係のある事物を扱った本草書であることから，「人魚」の医

学的効能に関する記述である。該当する記述が二件見い出される。一件は，人魚の骨が「へいしむれる」と呼ばれ下血を止める働きがあること，もう一件は，鯢魚（さんしょううお）を生で呑めば膈噎を治せることである。前者については，ヨンストンの『動物図譜』にも記載されていることであるが，1663年にオランダ商館長から幕府に献上された『動物図譜』が1717年まで幕府の文庫に納められていたこと，貝原益軒が福岡藩の家臣でもあることから長崎で『動物図譜』を手に入れることは可能と思われるが，彼が蘭学に必ずしも精通していなかったことなどから恐らくは李時珍私撰の『本草綱目』の影響と推測される。後者については，漢時代の歴史・地理書である『山海経』にもさんしょううおのことを人魚と呼び，人魚が至る所に生存していることが記されている。しかし『山海経』には，詳細は別稿で検証するが，膈噎を治す効能については記されていない。止血の効能同様，『本草綱目』の影響と推測される。

3.　寺島良安の『和漢三才図会』

貝原益軒の『大和本草』等江戸時代の本草学の研究に多大の影響を与えた李時珍私撰の『本草綱目』が日本に舶来した同じ年（1607年）に，明では王圻私撰の百科事典『三才図会』が刊行される。後にこの事典の影響のもとに大阪高津の医師寺島良安（生没年未詳）が30年以上の歳月をかけて完成させたのが『和漢三才図会』（1712年）である。本書は，題名からも明らかなように，図入りの百科事典で，本文105巻，首巻1巻，目録1巻から成り，全体で81冊，「和漢」，すなわち日本と中国の万物が，「三才」，すなわち天地人の三部に大分類されている。「人魚」は，「巻第四十九・魚類（江海有鱗）」の中に，鯛や鰯等48種の魚とともに分類されている。

人魚（にんぎょ，ジンイユイ），鯪魚

『和名抄』（鱗介部，竜魚類）に，『兼名苑』を引いて，人魚［一名は鯪魚］とは魚身人面のものである，とある。

『本草綱目』（鱗部，無鱗魚類，鯨魚）には『稽神録』を引いて次のようにいう。謝仲玉という人があった。婦人が水中に出没するのを見たが，腰から下はすっかり魚であった。また査（奉）道という人があった。高麗に使者として行き，海沙中に一人の婦人をみたが，肘の後に紅い鬚（ひれ）があった。この二物はともに人魚である，と。

推古帝の二十七年（六一九），摂津の掘江で罟（あみ）に入ったものがあった。その形は小児のようで魚ではなく，人ではなく，なんというものなのか分からなかった云々（『日本紀』）とある。いまでも西海の大洋の中に，ままこのようなものがいる。頭や顔は婦女に似ていて以下は魚の身体をしており，あらい鱗は浅黒色で鯉に似ており，尾には岐（また）がある。両の鰭（ひれ）には蹼（みずかき）がついていて手のようである。脚（あし）はない。暴風雨のくる前に姿をみせる。漁父は網に入っても気味が悪いので捕らえない。阿蘭陀では人魚の骨［倍以之牟礼（ヘイシムレ）という］を解毒薬としているが，すばらしい効目（ききめ）がある。またその骨で腰に付ける器物を作っているが，色は象牙に似ていて象牙ほどに濃くはない。[12)]

以上の引用のうち，『本草綱目』及び『日本書紀』に関わる部分についてはすでに貝原益軒の『大和本草』の分析の際に言及しており，また『和名抄』については後に別稿で触れる予定なので省略する。『和漢三才図会』の人魚についての記述で注目したいのは二点ある。第一点は，西海に姿をあらわす頭や顔が婦人に似た人魚とおぼしき魚の容姿と出現時期についての詳細な記述で，特に暴風雨が来る前に姿を現わし，漁父は網に入っても気味が悪いので捕らえないことである。ほぼ同様の記述がイエイツ William Butler Yeats（1865年-1939年）の『アイルランド農民の妖精物語と民話』Fairy and Falk Tales of the Irish Peasantry（1888年）にも認められるが，イエイツより寺島良安の活躍した時期が一世紀以上早いことから，寺島良安は何を参照したのであろうか。第二点は，人魚の骨［ヘイシムレ］の医学的効能についての記述で，寺島良安は「解毒薬」と記しているが，こ

の「解毒薬」についてはヨンストンの『動物図譜』にも，李時珍私撰『本草綱目』の影響が明らかな貝原益軒の『大和本草』にも認められないことである。人魚の骨の名前も貝原益軒は「へいしむれる」と呼び寺島良安とは若干異なり，効能についても下血を止めると記している。王圻私撰『三才図会』の影響なのか，定かでない。

4. 新井白石の『外国之事調書』

漢学者新井白石（1657年-1725年）は，1708年布教のため屋久島に潜入して捕らえられ江戸に護送されたイタリア人宣教師シドッチ Givanni Battista Sidotti を尋問し，その時の質疑応答の記録を1715（正徳5）年頃に『西洋紀聞』（三巻）の題名で刊行する。この尋問を契機に西洋の学問に関心を抱いた白石は，1633年以来毎年江戸に参府するオランダ人商館長から，西洋諸国の歴史，地理，風俗，キリスト教等について聴取する。その聴取の記録の一つが，新井家に伝わる自筆本『外国之事調書』と題せられた巻物一巻である。本書は，正徳三（1713）年2月27日の聴書から始まって全部で10の聴書から構成されていて，「人魚」に関係する記述があるのは，第2番目の聴書，すなわち同年3月5日の聴書の5番目の箇条書きである。

(f) 国図中にある人魚の事
メールマン男のすかたをいふ
メールメン女のすかたをいふ　海中にありて往々に見るといひ伝ふれともまことに　見たるといふものハなしカヒタンといふ百余年前ヲランダ七州のうちのハールレムといふ町の海にて人魚をとりしといふ事を書にもしるし　をきし事ハありそののち見しものとてもなし　其魚にのりし人の事これも人魚の類なり　琴を引キ笛を吹く体は人魚は海上にて妙音を奏するものなりといふ事をかたりしもの也此長魚ハ鯨也といふ美不審するハ我国の鯨は黒しこれは緑ニいろとりし也　如何カヒタンいふ海中にて見る時は水に　映して緑に見ゆるが故也鯨にもさまざまあり　ワルヘシ　ブレンス　ノルカープルなとの類あり我此国へ来る時五嶋の海にても見たりき小鯨たりフレンヘスの類と見へたりしかれとも　猶その形は大きなるものたり　角ある人これも人魚の類也惣して人魚　なとを絵かく事その海の広く深くして　よのつね人も到りかたき所なる事をかたとりて　それらの所には種々の水怪あるよしを　かたりしもの也真実にその物あるには　あらすといふ[13]

この聴書によれば，男の人魚はメールマン，女の人魚はメールメンと呼ばれていること，百余年前にオランダのハールレムの海で人魚が捕らえられたことが記録されていること，人魚が琴を弾き笛を吹くなど妙音を奏すること，また日本に来る途中シドッチは長崎県の五嶋列島の海で人魚を見たとのことである。人魚に雌雄の別があることは，ヨンストンの『動物図譜』にも掲載されている。また人魚のすぐれた音楽の才能については，美声によって舟人を誘惑し死に至らしめたギリシャ神話に登場するセイレン siren やドイツに伝わる「ローレライ」伝説の影響であろうか。

さらに新井白石の西洋関連の資料を調査すると，『西洋紀聞』関係資料の一つ「今村源右衛門日記」にも「人魚」に関する記述がある。大通詞今村源右衛門は，宝永五（1708）年屋久島で捕らえられたシドッチの護送に，翌年9月25日の長崎出立から同年11月1日の江戸到着までの約一カ月間加福喜七郎及び品川丘次郎とともに付き添い，西洋に関する事柄についてシドッチより聴取する。人魚に関係する部分を引用する。

蒼海，荒海にて，鯨様成大魚，又は海犬人魚セロへなど申候て，ヲツトセイのやうなる獣の形の物も御座候。[14]

人魚がオットセイに似ていることを示唆したこの記述は，当時の人々にとってオットセイが「人魚」の実像の一つではなかったかと推測されるのである。

5. 後藤梨春の『紅毛談』

江戸時代中期の本草家で蘭学の先駆者とみなさ

れている後藤梨春（1696年-1771年）は，江戸参府のオランダ人商館長への質問を通して入手したオランダの風土・風俗・地理・薬草・動植物・エレキテル等の情報をまとめて『紅毛談』（1765年）を刊行する。特に薬物（動物・植物・鉱物）についての記述が多く，「人魚」に関する項目も存在するので関係する部分を引用する。

> へいしむれる　人魚の骨なり。長崎へ来る，此もの偽多し。真を試るに女人の髪をもつて巻き，火中へ投じてやく，髪焼けざるを真とす。疱瘡の危急の症に是を用ゆ。[15]

人魚の骨「へいしむれる」が，疱瘡，すなわち天然痘の治療にも用いられるというのは初耳である。止血剤や解毒剤として人魚の骨が有効であることについてはすでに紹介したが，当時不治の病で多くの人命をうばった天然痘にも有効であるとなれば，おそらくは高価で求める人も少なくないため偽物が多くても当然であったと思われる。なお『紅毛談』は，西洋の文字，アルファベットを紹介したため幕府より発禁処分を命じられている。

6.　大槻玄澤の『六物新誌』

江戸時代後期を代表する蘭方医で蘭学者の大槻玄澤（1757年-1827年）は，奥州一関藩医大槻玄梁の嫡男として生まれ，江戸で杉田玄白や前野良沢より蘭学を学んだ後，長崎遊学を経て仙台藩の江戸詰藩医となるが，そのかたわら玄澤は芝蘭堂を開塾して蘭学教育にあたり，江戸蘭学界の中心的地位を占めるのである。彼は非常に多くの著訳書を残したが，例えば本論で取り上げる『六物新誌』（1786年）などその数は印行15部45巻，草稿121部198巻，合わせて243巻と伝えられている。

『六物新誌』は，絵入りの漢文で書かれた二巻本で，上巻では一角（ウニコウル），洎夫藍（サフラン），肉豆蔻（ニクズク），下巻では木乃伊（みいら），噎蒲里哥（エブリコ），人魚（ニンギョ）の六物が取り上げられ，これらの六物について玄澤は，ヨンストンの『動物図譜』やドドネウスの『草木誌』等の説を引用し，さらに日本や中国の学説も加え解説している。

> 人魚
>
> 茂質按舶来之物，有本邦俗呼曰歇伊止武禮児（ヘイシムレール）者，相伝言，是乃人魚之骨也，而貝原翁録之於大和本草，松岡翁挙之於用薬須知，而其名称産地，二書倶未詳説，然余竊疑是西洋之語，因執和蘭一二之書考之，未見記載者也，後及閲勇斯東私（ヨンストンス）之書，而以知其名則伊斯把你亜国（イスパニア）之語也，蓋人魚伊斯把儞亜国（イスパニア）呼曰百設武唵爾（ペセムエール），百設（ペセ）者魚也，武唵爾（ムエール）者婦也，乃婦魚之謂，而即人魚之義也，由此観之，歇伊止（ヘイシ）者則百設（ペセ）之訛転，武禮児（ムレール）者則武唵爾（ムエール）之訛転者可以知也，且加之更徴之於安蒲児止私巴亜列（アンブルシスパアレ），花連的印（ハレンテイン）等書及漢人之海記，我邦一二之古籍，又旁聴父老之実譚，而益信滔滔江海之中，自有此物，而乃所伝者不可以為妄也，且此物奇品，而己見採於薬餌，則我此挙不可不以論及也，故今摸其図訳其書而為之綱，其記籍実譚，但付之於其後，而為之目学者以此為之明據，而能弁難弁之物，則或為済世之一助者，亦未可謂全無，則余之所以不厭煩而為之也。[16]

茂質とは大槻玄澤のことで，大槻玄澤によれば，「ヘイシムレール」が人魚の骨であることは，貝原益軒の『大和本草』や松岡玄達（1668年-1746年）の『用薬須知』に記述されているが，「ヘイシムレール」の名称の由来についてはヨンストンの「禽獣虫魚譜」（『動物図譜』）に記されていて，「ペセムエール」（婦魚，すなわち人魚）から転訛したものとのことである。さらに玄澤は，「アンブルシスパアレ」（アンブロア・パレ）の「医事集纂」（『外科全書』），「ハレンテイン」（ファレンテン，1666年-1728年）の「東海諸島産物誌」（『新旧インド史』，1724年-1726年），及び中国の「海記」（『稽神録』，『洽聞記』，『徂異記』）等日本，中国，西洋の文献をあげ，人魚の容姿や薬効について検証している。

人魚の容姿については，日本や中国の文献では上半身が人間の女性の姿をし下半身が魚ということがわかるだけであるが，一方西洋の文献，例えばヨンストンやアンブルシスパアレの書では，牡と牝の人魚の図が掲載されるなど容姿が極めてリ

アルに記されている。司馬江漢がハレンテインの「東海諸島産物志」から模写した人魚の図も上半身が人間の女性に近い姿をし，下半身はリュウグウノツカイのような細長い紐帯類の魚の形をしている。

人魚の薬効などの効能についてみると，ヨンストンは，既に紹介した人魚の骨の止血の効能の他に，人魚の肉を皮膚の黒色斑点の上に貼ると黒色斑点が消滅することを記している。また『史記』には，「以人魚膏為燭」とあり，人魚の膏が燈油として用いられることから，曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』への影響がうかがわれる。さらに玄澤は，八百比丘尼伝説にも言及し，若狭国の漁師が捕まえた人魚の肉を娘が食べ八百歳まで長生きしたことを記している。

なお大槻玄澤は，『蘭説弁惑磐水夜話』(1799 年)でも「へいしむれうる」について記述している。

> 人魚を「へいしむれいる」といふは，「ぴつし，むゑいる」のあやまりなり。[17]

『六物新誌』は，「人魚」を扱った文献としては，東西の資料を駆使した約 30 ページにもおよぶ詳細な説明から判断しても，江戸時代のみならず時代を越えて日本で最も内容の充実した文献の一つといっても過言ではないであろう。

7. 小野蘭山の『本草綱目啓蒙』

江戸時代後期の本草家小野蘭山（1729 年-1810 年）は，松岡玄達に師事して本草を学んだ後私塾を開設し本草を講じたが，71 歳の時若年寄堀田正敦に招かれ江戸の医学館で本草を講じた。蘭山の講義を整理し刊行したものが，江戸時代最大の博物誌といわれる『本草綱目啓蒙』(1806 年)である。本書は，題名からも明らかなように，李時珍私撰『本草綱目』の影響が濃く，蘭山は『本草綱目』所収の動物，植物，鉱物に国産のものを加え解説している。「人魚」は，「巻之四十鱗部」の「鱗之四，無鱗魚二十八種」の一種「鯞魚」の名称で紹介されている。

> 鯞魚
>
> 人魚同名数品アリ。次条ノ鯢魚モ人魚トナズク。コノ条ノ人魚ハ淡水ニ生ジ，似鮎腹下翅似足者ヲイフ。和産イマダ詳ナラズ。稽神録以下ノ文ハ海人魚ナリ。腰以下ハ魚身ニシテ人頭ナルモノ，雌雄アリ。三才図会ニイズ。大和本草附録ニ，海女ハ海中マレニアリ。半身以上ハ女人，以下ハ魚身ナリト云。マタ全ク人形ナルモノモアリ。即，徂異記ノ文是ナリ。華夷考ニ，海人魚，東海有之，大者長五六尺，状如人，眉目口鼻，手足爪頭，皆為美麗女子，無不具足，皮肉白如玉，無鱗有細毛，五色軽軟，長一二寸，髪如馬尾，長五六尺，陰形与丈夫女子無異，臨海鰥寡，多取得養之於池沼，交合之際与人無異，亦不傷人ト云。大和本草附録ニ，海人ハ在海中形全ク人也，頭髪鬚眉，悉具足，手足ノ指水鳥ノゴトク相連テ水カキアリ，不能言語，飲食ヲ与レドモ不食，一種偏身肉皮アリテ腰間ニ下リ垂袴ノゴトシ，余ハ皆人也，地ニ上リ数日不死ト云。…人魚骨，蛮人ヘイシムレル，蛮人将来スルモノ贋物多シ。薬舗ニ貸スルモノハ黄貂魚歯及雉子魚歯ノ形状ニシテ，斜紋ナルモノアリ。イマダ真ナルモノヲ見ズ。坤輿外紀ニ，有海馬，其牙堅白瑩浄，文理細如糸髪，可為念珠等物，復有海女，上体如女人，下体為魚形，其骨為念珠，服之可止下血，二者皆魚骨中上品，各国貴重之ト云リ。[18]

小野蘭山は，鯞魚及び鯢魚を人魚と名づけ，『稽神録』，『三才図会』，『徂異記』，『大和本草』の「附録」など中国や日本の博物学関係の文献をもとに解説している。例えば淡水にすむ人魚は鮎に似ているが，海にすむ人魚には雌雄の別があって腰以下が魚身で頭は人間，身体の大きさは五六尺(「徂異記」)または六七尺(「広東新語」)，「蛮人」が持って来る人魚の骨「ヘイシムレル」は，下血を止める効能があり貴重であるが，偽物が多い，と述べている。

8. 司馬江漢の『西洋画談』

江戸時代後期の絵師で蘭学者の司馬江漢（1747 年-1818 年)は，鈴木春信に弟子入りし浮世絵を学

ぶが，その後小田野直武から洋風画の手ほどきを受け，その縁で『解体新書』の訳者の一人前野良沢に入門し，オランダ語を学び，本論で取り上げる西洋画の本質を論じた『西洋画談』(1799年)等兄弟子大槻玄澤らの援助の下，多くの西洋に関わる著書を残した。

人魚が論じられているのは，『西洋画談』と『和蘭天舶』(1805年)で，関係する部分を引用する。

> 譬ば人魚骨奇薬にして，蘭書中に伝記あり。印度亜の海島安貝那と云島に捕らへ獲者にして，其島の人其生る形状を模写し，其物は薬汁の内に貯へたり。安貝那は波爾杜瓦爾領して，後阿蘭陀爰を領す。特に人魚の図と貯へたる物とを観，色沢と形状とは，粉丹を以て彩り分ちて，文章に述ぶ。夫れ貯へる物は，年月を経ぬれば其真を失ひたれば，画図に非ざれば其物を知る事能はず〈人魚の説は，大槻氏著す六物新誌に詳也〉。是画は真にあらざれば用を為ざる也。
>
> (『西洋画談』)[19]

> 花蓮的印ト云蘭書ニ図説アリ。印度諸国ニ「ウォルデン・ボーム」ト云樹アリ，「ウォル」ハ根ヲ云，即チ根樹ト訳ス。樹上ヨリ細条ヲ垂テ，地ニ至テ根ヲ生ジ，林ノ如シ，年ヲ経テハ数十里深林ヲナス，葉茂リテ雨ヲ漏サズ，土人ハ居処トナス。亦此土の南海ニ人魚アリ，「メールシン」ト云，貌婦人ノ如シ，腰ヲ過テハ魚ノ如シ，鰭腰ノメグリニ在リ。又「カイマン」ト云モノアリ，即チ鰐ヲ云。此者大ヒナル者ハ長サ三四丈，好ンデ人ヲ喰フ，陸ニ走リ海中ニ住ム，人ノ声ヲナス，人是ヲ怪メバ即チ喰フ，ヨク婦人ヲ訛シ，必ズ通ズ，惟人魚ヲ畏ル。
>
> (『和蘭通舶』)[20]

オランダ人宣教師「ハルレンテイン」François Valentinの著書『新旧インド史』Oud en nieuw Oost-Indienや大槻玄澤の『六物新誌』を参照した司馬江漢は，人魚の骨が奇薬であること，人魚が東インド（インドネシア東部）の島アンボイナで捕らえられたこと，インドの南海に「メールシン」(人魚)がいて，顔は婦人で腰から下は魚で鰭があること，「カイマン」(ワニ）は人の声を出し，好んで人を喰うが人魚を恐れていることなどについて記述している。なお司馬江漢は，『六物新誌』にハレンテインの「東海諸島産物志」から模写した人魚図を掲載している。

III.　おわりに

本論においては，江戸時代における「人魚」像を解明するため主に外国，オランダや中国から舶来した博物学書，ヨーン・ヨンストンの『動物図譜』や李時珍私撰の『本草綱目』が与えた影響に注目し，大槻玄澤の『六物新誌』等に記述された人魚像を検証して，一定の結論を得た。例えば，人魚の容姿については，『六物新誌』のように雌雄の人魚の図を掲載したものもあるが，上半身が女性で下半身が魚と記した文献も少なくなく，本論で扱った文献でみるかぎりでは，アンデルセンの「人魚姫」のように，人魚は女性の魚というイメージが強いようである。人魚の効能については，人魚の骨が止血剤や解毒剤として貴重であること，人魚の膏は燈油として用いられること，人魚の肉は皮膚の黒色斑点の上に貼ると黒色斑点が消滅し，食すれば800年長生きすることなどである。

次稿においては，本論をふまえて漢時代の歴史・地理書『山海経』の影響を中心に江戸時代以前の文献に登場する「人魚」像について検証する予定である。この試みが明治以降の日本の文献に登場する人魚像の解明にもつながればと願っている。

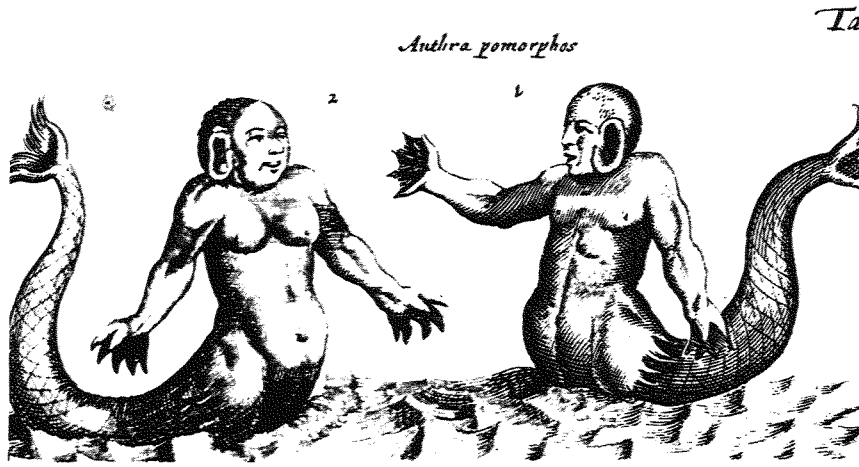
(2006年4月10日受理)

注

1)　原本はラテン語(1649年から1653年に，四分冊でフランクフルトで出版)で，オランダ語版はフラウシスM. Grausiusによって翻訳され1660年アムステルダムで出版された。

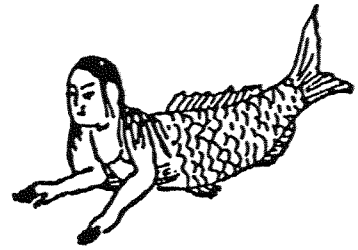
2)　磯崎康彦「ヨーン・ヨンストン著『動物図譜』が投げかけた波紋（二）ヨーン・ヨンストン著『動物図譜』とは，どのような蘭書か。」(『福島大学教育学部論集，人文科学部門第58号』1995年6月）p. 4-6.

3) John Jonston: Beschryving van de Natuur der Viervoetige Dieren, Vissen en Bloedloozse Water-Dieren, Vogelen, Kranken-Dielen, Slangen en Dranken, Amsterdam, p. 168.
4) 磯崎康彦「ヨーン・ヨンストン著『動物図譜』の舶載と翻訳」（『洋学 4』八坂書房，1996 年）p. 64.
5) 西村三郎『文明のなかの博物学　西欧と日本(上)』(紀伊国屋書店，2000 年）p. 210.
6) 益軒会編纂『益軒全集巻之六』（益軒全集刊部，明治 44 年）p. 324.
7) 同前掲書。p. 325.
8) 同前掲書。p. 345.
9) 同前掲書。p. 347.
10) 同前掲書。p. 447.
11) 藤沢衛彦『日本伝説研究二』（六分館，昭和 6 年）p. 40-42.
12) 寺島良安『和漢三才図会』（「東洋文庫 471」平凡社，1987 年）p. 183-184.
13) 宮崎道生『新井白石の洋学と海外知識』（吉川弘文館，昭和 48 年）p. 405-406.
14) 宮崎道生校注『新訂西洋紀聞』（「東洋文庫 113」平凡社，昭和 43 年）p. 210.
15) 『紅毛談/蘭説弁惑』（「江戸科学古典叢書 17」恒和出版，昭和 54 年）p. 15.
16) 『六物新誌・稿/一角纂考・稿』（「江戸科学古典叢書 32」恒和出版，昭和 51 年）p. 121-123.
17) 『紅毛談/蘭説弁惑』p. 35.
18) 小野蘭山『本草綱目啓蒙 3』（「東洋文庫 540」平凡社，1991 年）p. 238-239.
19) 沼田次郎，松村　明，佐藤昌介校注『日本思想大系 64. 洋学上』（岩波書店，1976 年）p. 492.
20) 同前掲書。p. 528-529.



ヨーン・ヨンストン『動物図譜』より

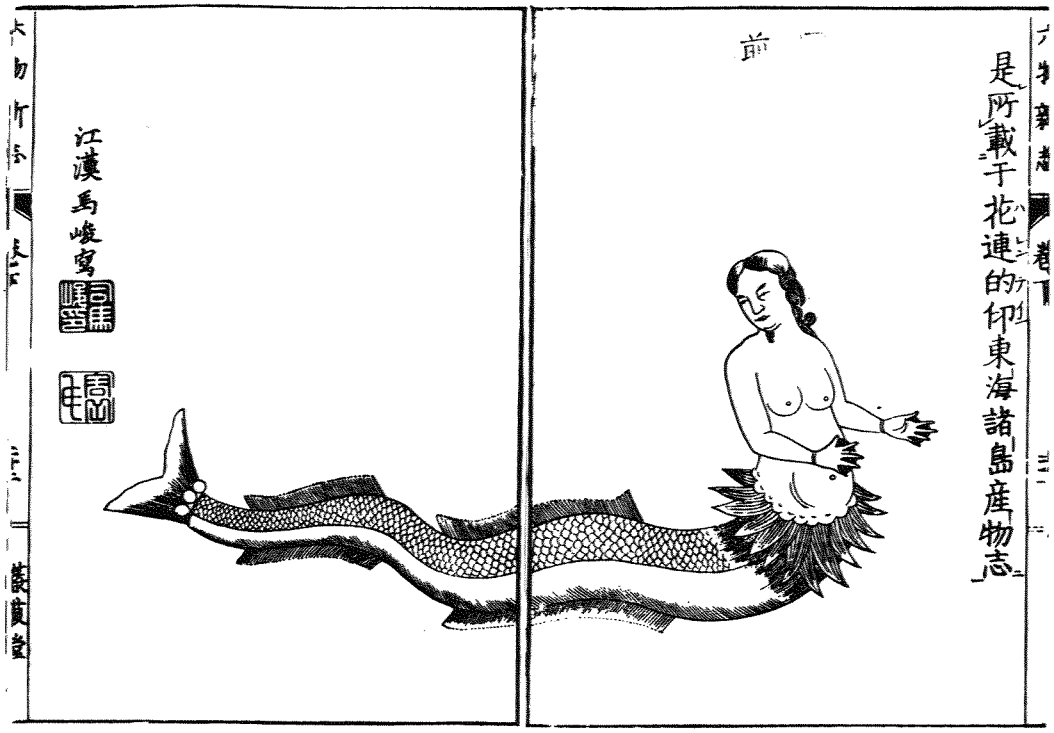
大槻玄澤『六物新誌』より



にんぎょ
人魚　鯪魚
シンイユイ

『和名抄』*（鱗介部、
魚身人面のもので、
『本草綱目』*（鱗部、

寺島良安『和漢三才図会』より



大槻玄澤『六物新誌』より

Das Bild der „Seejungfrau“ in der Edo-Zeit (2)
—— Über den Einfluss der importierten Bücher der Naturkunde ——

KUZUMI Kazuo

In der Edo-Zeit, wo das Tokugawa-Schogunat Japan streng von der Außenwelt abschloss, wurden viele Bücher der Naturkunde, z.B. „Dobutsu-zufu (Beschreibung von der Natur der vierfüßigen Tieren)“ von John Jonston und „Honzo-komoku (Klassifikation der Arzneipflanze)“ von Ri Jichin, von China und den Niederlande importiert, und diese Bücher übten einen großen Einfluss auf die Bildung des Bildes der „Seejungfrau“ in der Edo-Zeit aus.

Nun wird in diesem kleinen Aufsatz für die Erläuterung des Bildes der „Seejungfrau“ in folgenden Werken, auf die die obenerwähnten Bücher der Naturkunde höchstwahrscheinlich einen Einfluss ausübten, hauptsächlich untersucht.

(1) „Dobutsu-zufu (動物図譜)“ von John Jonston (1660).
(2) „Yamato-honzo (大和本草)“ von KAIBARA Ekiken (1709).
(3) „Wakan-sansai-zue“ (和漢三才図会) von TERASHIMA Ryoan (1712).
(4) „Gaikoku-no-koto-chosho (外国之事調書)“ von ARAI Hakuseki.
(5) „Komo-dan (紅毛談)“ von GOTO Rishun (1765).
(6) „Rikubutsu-shinshi (六物新誌)“ von OTSUKI Gentaku (1786).
(7) „Honzo-komoku-keimo (本草綱目啓蒙)“ von ONO Ranzan (1803).
(8) „Seiyo-gadan (西洋画談)“ von SHIBA Kokan (1799).